

橋本順光／鈴木禎宏編著

『欧州航路の文化誌―寄港地を読み解く』  
(青弓社、二〇一七年)

西原大輔著

『日本人のシンガポール体験―幕末明治  
から日本占領下・戦後まで』  
(人文書院、二〇一七年)

菅原克也

編集委員会の依頼により、以下に標記二著をあわせて論じる  
ことにする。

『欧州航路の文化誌』にまとめられた研究は、鈴木禎宏氏に  
よる「あとがき」によれば、日本比較文学学会会員有志による  
二〇〇四年の読書会にはじまるという。その後は「欧州・朝鮮・  
南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文学的  
研究」を課題とする二〇〇七、九年度の科学研究費補助金によ  
る研究に引き継がれ、その成果が二〇〇九年十月の日本比較文  
学会関西支部大会（立命館大学）でのシンポジウム「戦間期に

おける南方航路の比較文学―南洋、シンガポール、ペナン、イ  
ンド」として発表された。さらに二〇一一年の日本比較文学会  
第七十三回全国大会でのワークショップ「欧州航路の比較文学  
―和辻哲郎の『風土』を中心に」での発表が続く。本書の刊行  
は二〇一七年であるから、十年以上の時間をかけて実った研究  
だということになる。まずは、息の長い研究を大きく守り育て  
てきた関係者の熱意と努力に敬意を表したい。

『欧州航路の文化誌』の章立ては次の通りである。序章「欧  
州航路の文学―船の自国化と紀行の自国語化」（橋本順光）、第  
1章「欧州航路の起点と原点―横浜と富士山」（鈴木禎宏）、第  
2章「シンガポール」（西原大輔）、第3章「日本人が見た／見  
なかつたペナン―和辻哲郎『故国の妻へ』『風土』を中心に」  
（大東和重）、第4章「インドの代名詞コロンボー・デッキバセン  
ジャーとハシム商会」（橋本順光）、第5章「スエズの商人・  
南部憲一」（山中由里子）、第6章「日本人のマルセイユ体験―  
幕末遣欧使節団から和辻哲郎まで」（児島由里）、第7章「和辻  
哲郎『風土』成立の時空と欧州航路―歴史的偶然と地理的必然  
との交差において」（稲賀繁美）。これに橋本氏の「はじめに―  
もうひとつの海洋文学」と鈴木氏の「おわりに」、および索引  
がつく。

序章をふくめた全八章のなかで、何といっても面白いのが

南部憲一という人物の事績を掘りおこした第5章であろう。一九二二年十七歳で単身ポルト・サイードに渡り、南部兄弟商會を興してスエズ運河を行き来する日本人旅行者向けの商売を成功させ、第一次大戦後は（大正三年に竣工した東京駅の総工費二百八十万円を上回る）三百万の富を築いた人物をめぐる記述である。山中氏は、一九一〇年代以降のスエズ運河をとりまく地政学的、歴史的文脈、及びそれらと日本とのかかわりを手際よく整理し、南部の事業が成功した背景を的確に指摘する。その上で引用される徳富蘆花と高浜虚子の紀行中に描かれる南部という人物が、いかに生彩に富むことか。「凡そ日本人の事とし云へば、官辺の交渉から、無頼者の不始末のあと始末まで引受けて、南さんが無官の領事どころをやって居た」（二四九）と蘆花が書く南部は、三十七年にポルト・サイードの店を弟に任せて帰国するころには、運河を通過する「援蔭物資」の監視をしていたという。ポルト・サイードという港町の日本近代史との関わりが生々しい。

次に面白く読んだのがコロソポのハシム商会を取りあげた第4章である。ハシム商会とは一八九二年に創業した日本人客専門の寶石店兼旅行代理店で、店員は日本語で接客につとめたのだという。野上弥生子が『欧米の旅』で描く「明治以来の名士の名刺をトランプのように並べ」（二二八）てみせる商魂

のように再評価されるのか、読者としてはまずそこに注目するようになる。

この課題にもっとも真摯に取り組もうとしているのが第3章である。大東氏は、モンスーン域に属する「南洋」の風土を観察する和辻の議論の生成を、イギリス帝国の植民都市ベナンの歴史を参照しながら、少し距離を置いて検証する。問題とされるのは「力の横溢の単調さ」を特徴とし「受容的忍従的な関係に於て固定した」とする和辻の南洋観であり、「従順忠実」なインド人と、経済力を蓄えた「海峽華人」との対照である。「シナ人」として論じられる中国人をめぐる議論には、「支那人の発展力」に感嘆する鶴見祐輔の『南洋遊記』や、「支那人の富と勢力」と教育水準に着目する野上弥生子の記述が興行きを与える。大東氏は、帰国後の和辻が一九二九年に『思想』に寄稿した「支那人の特性」、三十五年刊行の『風土』第三章の「支那」、一九四四年刊行の新版『風土』の記述を比較して、海峽華人に対する和辻の認識の変化を辿り、昭和戦前の日中関係がその中国観に強く影響を与えたことを指摘する。和辻のいう抽象概念としての時間性・歴史性ではなく、生々しい歴史的文脈こそが、空間的に把握される風土の認識を支えていたこと、そこに「時代の思考の相貌が浮かび上がってくる」（一一四）ことを大東氏は言う。鋭い指摘と言えよう。

のたくましさは、田山花袋『海の上』や、石川達三『蒼氓』の登場人物たちの話題にも上る。寶石商の押しの強さに「この人は何をあきなう恋人の紅き涙としろき涙と」（二二九）と詠んだ与謝野晶子の歌が印象的である。

第4章を担当する橋本氏は、あわせてインド洋のデッキパベンジャーをとりあげる。シンガポールやベナンとコロソポのあいだを行き来するインド人出稼ぎ労働者とその家族である。船賃の節約のため甲板にテントを張って自炊する家族団欒の姿を「見る人をして涙を催さしめるほどに感傷的」（二二三）であるとする『風土』の和辻は、そこに「受容的忍従的な特性」を認めることになる。

横浜からスエズ運河を通ってマルセイユにいたる欧州航路に日本郵船が参入したのは一八九六年のこと。本書は、第二次大戦後の航空旅客機の出現まで、主に日本郵船の欧州航路で旅した日本人たちの旅行記を「海洋文学」として再評価し、航路が形成したメンタルマップを寄港地の順に取り上げ、同時に和辻の洋行と『風土』とを再評価しようとする試み」（二六）である。和辻の『風土』がとりわけ注目され、各章の記述において横断的な参照枠となるのはそのためである。各寄港地をめぐるどのような「メンタルマップ」の記述がなされるか、日本人による欧州航路の集積的経験を背景に『風土』（一九三五年）がどの

横浜を扱う第1章、シンガポールを扱う第2章、マルセイユを扱う第6章は、それぞれ篤実な研究の成果があらわれている。富士山という絵画的象徴と結びあわされる横浜、西航の場合と東航の場合において異なる姿をあらわしたシンガポール、多くの日本人にとって「初めて踏む欧羅巴の土」であったマルセイユ。いずれにおいてもメンタルマップとしての特質を捉えた議論が展開され、提供される情報も貴重である。ただし、本書全体を横断的に結びあわせる視点はやや弱いように思われた。これは第5章にもいえるであろう。

第7章は、和辻の留学経験を和辻の思想形成の問題として論じる。稲賀氏はまず「洋行」という経験の捉え方をめぐる世代間の相違を押さえた上で、和辻本人が強く望んで洋行したわけではないこと、滞欧中の現地の人々との接触もきわめて希薄であることを指摘する。そのような自分自身の洋行経験との距離があるのである。さらに『武士道』（一九〇〇年）の新渡戸稲造や、『茶の本』（一九〇六年）の岡倉天心との対比において、次のような観察が述べられる。

（…）和辻や大西（克禮―引用者）が主著をもつばら日本語で著述したときには、欧米への発信忌避と、いわば「本場」

への「場末」の遠慮と、さらにそれとは裏腹な内弁慶的な姿勢を指摘せざるをえない。それはある意味では、外国航路に頼った洋行から、日本郵船による自前の洋行への変化に対応する、時代の違いのなせる業、必然の副作用でもあった。「東洋美学」研究の盛行は、洋行帰りの故郷再発見というだけではなく、哲学者の洋行がもはや賞味期限切れになり、意味を失おうとしていた時代相の反映でもあった。そして西洋美学に対して東洋美学を主張する際に大西が援用した「気象風土」といった表現には、同船の和辻との交友の痕跡が刻印され、それ自体当時の知的「気象風土」を傍証しているものかもしれない。

(一九四〇五ページ)

和辻の時代に洋行の意味が変容したこと、それが帰結する東洋及び日本への関心は当時の日本の知的「風土」をあらわすとする、この稲賀氏の指摘は興味深い。

「序章」における橋本氏は、ヨーロッパにいたる航路が幕末以来の日本人に表した意味を、西航の場合と東航の場合にわけて歴史的に概観した上で、世紀転換期以降の洋行の記録は(一)日本郵船による航路の自国化、(二)大学教員の洋行による学問の自国化、(三)「世界表象の自国語化」を表すとの見通しを

示していた。この三つの点が顕在化するのは、第一次大戦後イギリスの東洋航路に代わって日本郵船が欧州航路の運航を確立する時期である。和辻の洋行はまさにこの時期にあたる。本書において和辻の洋行がひときわ注目されるのはそのためである。

七人の共著者による『欧州航路の文化誌』には、日本とヨーロッパを往復した日本人たちに関する興味深い逸話がふんだんに盛り込まれている。寄港地に関する情報等も貴重で、読み物としても面白い。

ただし、和辻の洋行体験とその成果たる『風土』に着目しようとする観点で、本書の各章を結ぶ横糸としてうまく機能しているかと問うなら、やや首を傾げざるをえない。和辻の例は一つの典型を示すであろうが、和辻の洋行が照らした問題の射程には収まらない叙述が、本書には多くふくまれる。一方で、稲賀氏の論考の後半部において、和辻の『風土』の成立がハイデガーの受容にはじまる同時代の思想・哲学の文脈において説明されるように、『風土』における和辻の思想が欧州航路の体験のみに由来するわけではない。

そのあたりどうであろうか。本書に関わる七人の共著者たちにさらなる検討を促したいところである。

次に西原大輔氏の『日本人のシンガポール体験』を論じる。

筆者は『欧州航路の文化誌』の第2章を担当した西原氏の筆致が、やや熱意に欠けるかに感じられたのを不思議に思った。一つの章としてまとまりはついており、求められる情報は十分に盛り込まれているものの、何かもの足りない印象を抱いたのである。その疑問が、この『日本人のシンガポール体験』を読んで氷解した。こちらは実に著者の思いが溢れた本である。本の作りは小ぶりだが「日本人のシンガポール体験」が網羅されており、論述も手堅い。『欧州航路の文化誌』の第2章は余滴のようなものだったのだろう。

目次を摘記しよう。まずは「はじめに」があり、「第一章 明治維新まで」、「第二章 明治文学の中のシンガポール」、「第三章 寄港者が見たもの」、「第四章 大正・昭和の美術と文学」、「第五章 シンガポール陥落」、「第六章 昭南島時代」、「第七章 第二次世界大戦後」と続いて「あとがき」にいたる。澁澤龍彦が『高丘親王航海記』に描く高丘(真如)親王の時代(九世紀)から、村上龍の『ラッフルズホテル』(一九八九年)まで、日本人とシンガポールとの関わりを歴史的に通観した労作であり、決定版のおもむきを持つ本である。

評書

「あとがき」によれば、西原氏は二〇〇〇年以降、日本シンガポール協会の機関誌に「日本人のシンガポール体験」と題す

るエッセイを二〇一一年まで計五十回連載した。その後さらに十年という歳月をかけて完成をみたのが、本書なのだという。二十五歳でシンガポール国立大学に日本語教師として赴任してから、二十五年の月日を経たのちの本である。

本書のよいところは、小さな事実を丹念に拾い集めた記述が、単なる情報の羅列になっていないことである。次々に繰りだされるエピソードが「日本人のシンガポール体験」という構図のうちに的確に落とし込まれ、大きなストーリーの流れを生みだしていることである。

シンガポールには実に多彩な日本人たちが来ては去った。幕末の遣外使節団、欧米への留学生、「娘子軍」たる売笑婦、画家、彫刻家、陶芸家、詩人、小説家。「日本人の記録を定点観測することにより、観察者である日本側の変化もろろかを知ることができる」(一六四)とは、日本人たちの個々の体験の記述を積みあげてゆく西原氏が示す見通しであり、本書が実証ののちに確認することである。

読んでいてことのほか引き込まれるのは、第五章以降に語られる戦争の時代のシンガポールである。微用作家として「昭南」と改められたシンガポールで英字新聞編集に携わった井伏鱒二。昭南日本学園で日本語教育を推し進めた神保光太郎と中島健蔵。さらには北川冬彦、中村地平、吉川英治、佐藤春夫、

大佛次郎、そして佐多稲子と林芙美子。画家・芸術家としてはシンガポール陥落にいたる軍事作戦を描いた藤田嗣治と宮本三郎を言い落とすことはできない。それから荻須高德と小津安二郎。これに芸能慰問団の徳川無声らがまじる。あらためて眺めわたしてみると、四年足らずの期間に実に多彩な才能が集まったものだと思う。

昭南時代の日本人の活動の記述において、西原氏は歴史に対するすぐれたバランス感覚を発揮する。この時代この場所に生きた人々の、こころざしややりきれなさを、うまく掬いあげている。昭南植物園を略奪から救った田中館秀三や、昭南博物館をなかにだちに友情を育んだ徳川義親とE・J・H・コーナー。彼らの逸話はじつに美しい。

その一方で西原氏は、歴史に対する作為を鋭く指摘する。ここからは本学会初代会長に関わる。以下、西原氏の記述を引用しよう。

占領下のシンガポールでは、日本語普及運動も推進された。神保光太郎『昭南日本学園』には、「日本語運動を唱へ出した人は、中島健蔵君であった」（二五頁）とある。中島は天長節の四月二十九日付『陣中新聞』に、「日本語普及運動宣言」を発表している（二六〇―二六一頁）。

があつて便利である。人名の立項は四百名を越える。シンガポールを通過した日本人、一時的にせよ滞在した日本人を考えようとする際、本書は事典としての機能を担いうる。興味深いのは、これらに加えて五ページに及ぶ英文の目次が巻末に付されていることである。西原氏が英文目次にこめた思いはさまざまに想像されるが、果たしうる機能は大きな拡がりを持つであろう。

英語でreadableと評されうる、読んで飽きることない文章に、西原氏の思いと筆力を感じた。

興味深いことに、その中島本人の戦後の証言は、むしろ日本語普及運動に消極的である。中島健蔵『雨過天晴の巻回想の文学⑤』によると、「日本語運動には反対はしなかったが、いや応なしにその「日本語普及運動宣言の」作文を軍司令部から押しつけられ、「むしゃくしゃした気もち」を持っていたという（九九頁）。また、「仕事熱心と見られてもいなかったが、いろいろな状況に追いつたわたくしの苦々しい心境」（一〇一頁）とも述べている。しかし、これらの言葉を額面通りに受け取るわけにはいかない。『雨過天晴の巻』では、戦後イデオロギーによる過去の言動の糊塗が行われている。中島健蔵は昭南島で、むしろ積極的に日本語運動を押し進めたと見るべきである。

（二〇三ページ）

西原氏の批判的まなざしは鋭いが、これは戦中のシンガポールの日本人の記憶が、戦後史の文脈においていかなる変質を遂げうるかを示す例として読むことができる。総じて、西原氏の記述は歴史の流れを図式的に捉えることからは遠く、あくまで個人の経験のレベルに寄り添うことを選択する。それが本書の美質をなす。

本書の巻末には「人名索引」と「事項索引」及び三種の地図